

# コンピュータソフトウェアを用いた 音声付き音読の英語リスニング・スピーキング能力への効果

The Effect of Computer-Assisted Oral Reading While Listening  
on the Development of Listening and Speaking Proficiency

H27海人12

派遣先 外国語教育とテクノロジー第6回会議（アメリカ合衆国・ボストン）

期 間 平成27年8月11日～平成27年8月15（5日間）

申請者 テンプル大学ジャパン大学院 教育学英語教授法専攻

博士課程後期課程 鈴木 聡 子

## 海外における研究活動状況

### 研究目的

普段英語を聴いたり話したりする機会がほとんどない環境で、英語の音声能力を向上させる一つの方法として、音声付き音読がある。近年、音声付き音読は日本の大学のCALL教室で容易にできるようになったが、その具体的な効果に関する研究は少ない。本研究では、コンピュータソフトウェアを用いた音声付き音読が、英語リスニング・スピーキングへ与える効果を様々な角度から検証した。

### 海外における研究活動報告

申請者は、本派遣により米国ボストンで開かれたForeign Language Education and Technology VI Conferenceへ参加した。この会議は、International Association for Language Learning TechnologyとJapan Association for Language Education & Technologyの共同開催の国際会議で、今回第6回目の開催であった。申請者のプレゼンテーションは二日目8月12日の午後で、パワーポイントを用いた発表を15分間行った後、質疑応答を10分間行った。

発表内容は、まず、問題背景として、日本における英語話者需要の高まりと併せて、日常生活においては日本語しか使われない環境であることを示した。このような環境要因の結果として、英語の音声面の能力を習得することの難しさを指摘し、その打開策としてコンピュータソフトを用いた音声付き音読を提案した。その教育効果を報告する際に、日本の大学におけるCALL教室での練習風景なども紹介した。その後、授業の流れを詳しく説明し、最後にCALLが英語リスニング・スピーキングへ与える効果の検証を統計分析を活用して提示した。

調査方法および結果の詳細を述べると、本研究では、週一回3ヶ月間に渡る音声付き音読の授業の事前事後にテストを行い、その効果を検証している。そのテストの信頼性と妥当性は、ラッシュモデルを使用した統計ソフトを使用して確認を行っている。なお、効果における英語リスニングの検証では、独自に開発したリスニングディクテーションテストを使用した。結果、音声付き音読をした集団はそうでない集団と比べ、リスニングスコアが上がっていた。英語スピーキングに関する効果では、事

前事後テストとして、音読音声の録音を行った。結果の検証には、ソフトフェアを使用した音響分析と評価者を使用した評価を実施した。その結果、英語の音読の流暢さと英語のリズムの向上がみられた。また、リスニング力が向上していた学生は、音読の際ポーズ(休止)をすることが少なくなるという傾向がみられ、これは音の連結を理解再現する能力がリスニング力に関係すると考察した。また、フォローアップのため、学生にも英語の聞き方や話し方に変化があったかどうかのインタビュー調査も実施している。その結果、音声付き音読練習を行うと、単語レベルでなく意味のかたまりごとに英文を聴き理解するようになり、音の連結が以前より流暢に出来るようになったという意見があるなど、統計分析の結果を裏付けるものとなった。

申請者の発表にはアメリカをはじめとする様々な国からの参加があり、今回の学会参加の意義の一つであった日本におけるCALL教室を活用した授業についての知見を広めることが出来たといえる。実際に、発表後の質疑応答では、コンピューターソフトを使用した音声付き音読の工程についてより詳しく説明を求める質問があり、発表内容に加えて、より詳細な情報を伝えることができた。このような情報を提供できたことは、学会参加者が今後実施する授業や研究のヒントになったと思われる。また、音声付き音読は日本で盛んに研究され

ていることから、日本人の研究者から今後の研究の参考になるような鋭い質問も頂いた。このようにCALLに関する活発な議論を日本人研究者が海外で行うことも、日本におけるCALLの拡がりを示す良い機会となったといえよう。

また、今回の国際会議では、最新のCALL関係の研究を知ることが出来たことに加え、様々な国のCALL関係の研究者の方々とネットワークを築くきっかけとなった。今後もこのネットワークを活用して意見交換を行い、海外の研究者との共同研究なども視野に置いてゆきたい。また、同じ大学のアメリカ校出身者であるメインプレゼンターの一人と食事を共にする機会もあり、そこで、アメリカの小規模大学における通信教育講座開発の重要性の高まりなどの話を個人的に聞くことも出来、新たな分野に向けた視点を開かされる得難い経験をする事ができた。

このような貴重な機会を与えて頂き、貴財団には大変感謝しています。今回の経験のお陰で研究に対する意欲がより一層向上しました。今後もCALL関係の研究をはじめとして様々なコンピューターを活用した英語教育の研究を行い、国内外の学会でその効果を発信してゆきたいと思います。

**この派遣の研究成果等を発表した  
著書、論文、報告書の書名・講演題目**

博士号の学位論文として現在執筆中であり、脱稿後、論文審査会の承認を得て発表予定。